

宇宙エレベーター技術 小中高生が挑戦

競技会に62チーム

日本発の航空宇宙分野の最先端技術「宇宙エレベーター」に、子どもたちも熱視線を注いでいる。宇宙エレベーターと同様の原理でロボットを昇降させる技術を競う小中高生対象の競技会が今月、東京都内で開かれ、過去最高の六十二チームが参加。開催の陰には「子どもたちが宇宙への夢に関心を持ってほしい」との教師の思いがあった。

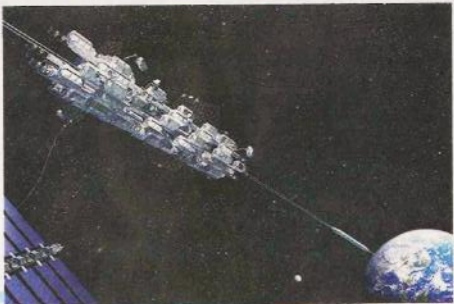
(木原育子)

夢天まで届け

「刺激になった」

宇宙エレベーターは、地球から約三万六千キロ離れた静止衛星に人や物を運び、構想。理論的には実現可能で、研究者が数年後の宇宙空間での実証実験を目指すなど現実味を帯びている。だが、そんな夢の技術に将来を担う子どもたちが関わる場はほとんどない。情熱をどう継承するかが課題だった。

立ち上がったのは、小林道夫教諭(左)や佐藤克行教諭(右)らだ。彼らは、今年八月に東京都江東区にある「夢天まで届け」のモデルまで、ロボットに乗せたフィギュアなどを運ぶ。その正確性と速さを競った。



宇宙エレベーターに見立てた競技に盛り上がる子どもら。8日、東京都江東区の日本科学未来館で宇宙エレベーターの想像図。大林組提供

宇宙エレベーター 宇宙空間の人工衛星から地表までケーブルを垂らし、人や物を乗せた昇降機が行き来する。ロケットよりも安全で費用も安く、宇宙飛行士用の訓練を受けていない人も利用できる。研究を進める日本大理工学部(千葉県船橋市)の青木義男教授によると、1991年に鉄20倍

の強度、重さアルミニウムの半分という炭素素材「カーボンナノチューブ」が発見され、研究が飛躍的に進んだ。地球と宇宙をつなぐケーブル素材として期待されている。ゼネコン大林組が、同じく研究を進める静岡大工学部とも共同し、10兆円をかけた2050年に実現させる見通しを示している。

同志社中学校

宇宙エレベーターコンテスト

2015年11月8日(日)

同志社中学の学びプロジェクトの教科企画として急ぎょチーム編成して挑戦した宇宙エレベーターコンテスト。東京新聞 2015/11/12(木)夕刊に取り上げていただきました(写真)。

次年度は関西でも開催をとの声が高まっています。宇宙エレベーターコンテストは、宇宙/ロボット/プログラミング/正答のない課題解決/ものづくり など今の教育界の課題にダイレクトに応えます。このようコンテストや、次世代を担う子どもたちの技術教育や科学教育のイベントを技術科は応援していきます。

東京新聞に掲載されました

2015年11月12日(木) 夕刊